

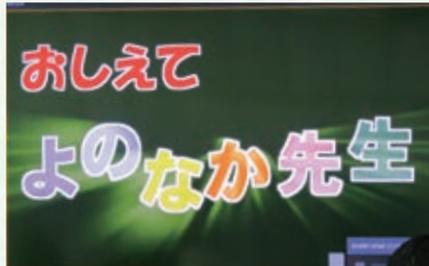


## 旭中学校 ビデオメッセージ授業「第一次産業から再発見 延岡の魅力」

旭中学校の1年生は、総合的な学習の時間「あさひタイム」を活用して、地域を知る学習(第一次産業から再発見 延岡の魅力)を行っています。今回は、農業と水産業に携わっておられる方々のビデオメッセージを視聴し、第一次産業に興味を持つとともに、今後探究するテーマについて考えることをねらいとした授業でした。ビデオメッセージは、延岡市キャリア教育支援センターが4名の方に取材を依頼し、ワイワイテレビ様のご協力により制作したものです。4名の方のビデオメッセージを視聴しながら、生徒たちは、探究したいテーマについて真剣に考えていました。



【果樹栽培～田口正幸さん】



【きゅうり栽培～遠田祐星さん】



【ひわか本サバ養殖～中西彬裕さん】



【ビデオメッセージ視聴の様子】



【水産物加工～濱田弘太郎さん】

## ～キャリア教育実践交流会～

ビデオメッセージの紹介や今後のキャリア教育の在り方等についての意見交換をしたいと思います。たくさんのご参加、お待ちしております！！

7月16日(木) 社会教育センター会議室2 19:00～

## 人の喜びや驚きを目標に変わり続ける

緑ヶ丘小学校 校長 坂元 浩

心に残っているTV番組があります。NHKの「プロフェッショナル仕事の流儀」で革新的なカレーオーナーシェフが紹介されていました。驚いたのは、カレー作り20年で、1度作ったカレーは2度と出さず、1000種類のオリジナルカレーを作ってきたというそのスタンス。めざすカレーは『未知なる美味』。カレーというジャンルだけを見ていると型が決まってくるので、そこから出て行こう、変わろうとする前向きな姿勢が伝わってきました。厨房ではベテラン・若手に限らず、ともにアイデアを出し合うことにこだわっているそうです。なぜここまでカレー作りを追求するのか？シェフ曰く「未知なる美味しさ、人が驚き感動するようなカレーで喜びを与えたい。」この想いは、以前、お菓子の“虎彦”の上田和泉氏が北浦小の子どもたちへ語っていただいたお話と重なります。お菓子づくりを通して、人に対する熱い想いを感じます。延岡の子どもたちが、誰かの喜びや驚き、そして自分自身の喜びを目標とし、そのために自分が変わり続けるんだという気持ちをもった人に育ってほしいなあと、ひろし風オリジナルカレーを食べながら願っています。



## 「若い時の苦勞は買ってでもしろ」

黒岩小中学校 校長 安在 博二

「こんないい制度があるちゃね」大学入試後、正門でチラシを受け取り、バッグに入れて帰りました。そのチラシを見た母の言葉です。そして、私は新聞販売店に住み込み、新聞配達をすることになりました。新聞奨学生というものです。大学の授業料は、新聞社が払ってくれ、月々の給料から返します。朝夕の食事代は払いますが、部屋代はタダです。残りの2万円位が生活費でした。朝夕の新聞



配達、月末の集金、夜はセールスをして回りました。朝は3時半起床、新聞に折り込みを入れて、4時から6時半頃まで250部配達します。その後、学校に行き、午後4時から夕刊を120部配ります。この新聞配達で一番辛かったことは、自分の配る場所は自分しか知らないということです。風邪をひいてどんなに具合が悪くても、どうにかして配らなくてはならないのです。若い時の苦勞は買ってでもしろといいますが、あの3年間があったからこそ、今どうか社会人としてやっつけられていると思います。

## 子ども達の夢

西小学校 校長 出師 秀也

令和元年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、縮小した異例の卒業式となりました。卒業のしおりの中には、卒業生全員の将来の夢が記されており、一人一人の夢を確認しながら、子ども達の優しさとかくましさを感じました。

その夢には、約25種の職業がありました。エンジニア、野球選手、大工、臨床心理士、シェフ、医師、介護士、設計士等々、12年間の中で、何らかの形でその職業に携わる人の生き様との出会いがあり、きっと惹かれるものがあったのだと思います。

それぞれ違う夢ですが、その仕事に就きたい理由には、共通するものがありました。それは、人の役に立ちたいということ…。

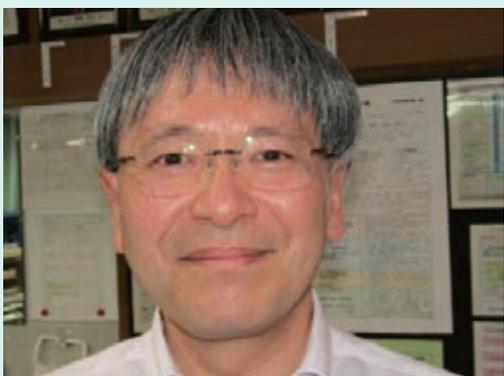
自己満足ではなく、人の喜び、人の幸せ、人の感動、人の笑顔に生きがいを見出し、自己実現に向かっていく、そんな子ども達を育てていくことが、私たち大人の使命なのかなと改めて感じたところです。



## 「君たちはどう生きるか」

旭中学校 校長 池野 宗宏

本校は「キャリア教育」を核とした学校づくりに取り組んでいます。その中で特に大切に思うことは、一人一人が自分の内面と対話する「自問自答」の力を育てるということです。授業で得られる知識や技能も、教師や地域の方々、あるいは外部講師による学びの演出も、その「学びの先」にあるもの、力の向かう方向への自覚がなければ、人生の座標を定める



レベルには昇華しません。「自問自答」の力は、その自覚を促す原動力ともいべきものです。若い頃「君たちはどう生きるか」という一冊の本に出会いました。「どう生きるか」と自らに問いかけその答えを探究することは、授業や生活の中で蓄えた力の使いどころを、人や仕事や社会の座標軸の中で考え、自分に最もふさわしい生き方を模索する営みに他なりません。人生という長いスパンで、自らの生き方に主体性と責任をもつ、そんな意志と能力を育てていきたいと考えています。